

朝の通勤ラッシュ、郊外のこの街から乗り込む電車はそれなりに混雑しているが、まだ余裕がある。

俺は毎朝、乗る予定の電車の二本位前の電車がホームに入ってくる頃にホームのいつもの位置に立つ。別に早く並んだからといって座れるというようなものではないが、それが習慣となっている。

この歳で一人暮らしの俺には、他にもいろいろと習慣がある。会社から帰ってきた時は、この駅の近くのコンビニで食料を調達し、漫画雑誌の発売日ならそれも買う。そして、酒のつまみと新発売のビールがあつたらそれを試しに買い込む。それらをぶら下げて誰もいない家に帰る。一人暮らしには贅沢すぎる一軒家だ。こんな俺でも二十代の頃に一度結婚直前までいったことがある。その時、俺の実家が遊んでいた土地を売って建ててくれたのがこの家だ。結婚話は式の直前に破談になった。相手は当時趣味でやっていたバンドのメンバーの女性。どっちが悪いという訳でもなく、しいて言えば、

どっちも若すぎたんだと思う。

話が逸れた。俺の習慣の話だった。

家に帰ると、カバンを置いてスウェットに着替える。バスルームに行つて、軽くバスタブをシャワーで流し、自動給湯のスイッチを入れる。そして、家から駅の方まで軽くジョギングする。休憩を入れながら、ぐるっと回ってほしい一時間程だ。もちろん、雨の日は中止する。そして、帰って風呂に入つて食事、酒。あとはテレビを見て、ネットをしぼらく漂つて、眠くなつたら寝る。

あるいは、時にはブルーレイを見てから寝るときもある。主に憂き晴らしに。

この家を建てるとなつた当時はバンドをやっていたので、地下に防音を施した練習用の部屋を作っておいた。破談になつたのを機会にバンドは解散し、練習室も物置になつていたが、数年前からちよつとしたミニシアターのように使っている。そこで何の気兼ねもなく大音量で映画を見て憂きを晴らすのだ。

そんな俺の習慣、別に変える必要は感じていない。特に朝のホームに立つ時間は。

朝、いつもの時間にホームのいつもの位置に立つ。線路を挟んで向かい側のホームの階段を見ると、ちょうど彼が友達二人と一緒に降りてくる。そして、俺のほぼ正面に立って電車を待つ。

彼は黒い学生服に身を固めている。中学一、二年というところか。友達と楽しそうに何か話しているが、線路の向こう側の話し声は朝の駅の喧噪に紛れてここまでは届かない。他の二人に比べて少し背が低い彼は、笑顔が印象的だ。まるで何の汚れも知らない、世の中に醜いものなど何もないかのような、屈託のない笑顔だ。昨今のいろんな事情からか、学生服には名札のような物はない。まあ、あつたとしても、ここからでは読み取れるようなものではないだろうが。

やがて、彼の方に電車が入ってくる。少し遅れて俺の乗る電車もホームに入ってくる。そして、俺達が乗る電車は、それぞれ反対方向に動き出す。

俺は独り身をもてあましながら、そんな生活を続けていた。
(あの子とやれたらなあ)

下品な表現だが、それが今の俺の正直な気持ちだ。そして、俺の嗜好はそういう方向だ。結婚も考えたことがあるだけに、

女性に興味がない訳ではないが、どこかの学園ドラマにでも出てきそうな、明るくてかわいい少年を俺のモノにしたいと思っている。

きつとオナニーとかもしてるんだろうな、などと想像しながら……いや、もとい、妄想しながら、毎日彼の姿を眺めている。

そんな日々が続いた。それはそれで幸せだったように思う。今にして思えば。

ある日の朝、いつもと同じように、いつもの時間にいつもの位置に立ち、いつもの階段を見る。いつものように彼等が降りてくる。が、彼はマスクをしていた。

彼等三人が俺の前……といっても、線路の向こうだが……に立つ。彼がいつもより大人しい。友達二人もいつものようにちよつかいをかけたりしていない。マスクから覗く彼の顔が何となく赤いような気がする。俺がそう思ったのとはほぼ同時に友達の一人在彼のおでこに手を当てる。何か話している。彼が首を横に振る。もう一人も彼のおでこに手を当てる。二人で彼の肩に腕を回し、体を反転させる。最初におでこに手を

当たてた方が彼の背中を押す。彼は振り向きながらも階段に向かった。

(風邪か?)

俺はホームの電車待ちの列を離れて階段に向かう。早足で階段を上り、彼の姿を探す。すぐに見つかった。彼はそのまま改札を出て、左に消えていく。俺もその後を追いかけた。

(まるでストーカーだな)

そう思いながら、でも彼のことか心配だから、などと理由を付けて後を追う。彼は階段を降りて駅の外に出ると、階段の裏の方に回り込んだ。

(一体、どこに行くつもりだ)

そんな方に何かあったかな、と考えながら追いかける。そこには公衆電話があった。彼はそこで電話をしている。

(今時の中学生ならスマホとか持つてて当たり前じゃないのか)

公衆電話がまだあることにも驚いたが、それよりも彼がスマホを持っていないことに驚いた。単に今日は忘れてきただけなのかも知れないが。

そのまましばらくの間、彼はそこを動かない。

(大丈夫か?)

俺は少し心配になる。すると、まもなく女性が彼に近づい

た。彼もその女性の方に数歩近づき、何かを話している。女性が彼の額に手を当てる。カバンから何かを取り出し、彼に渡す。

(母親か?)

恐らく、彼は家に電話して母親を呼び出したのだろう。が、母親は駅に上がる階段の前まで彼と一緒に歩くと、そのまま階段を上っていった。彼はまた一人になる。駅前の道をそのまま歩き続ける。だいたいどこに行くのか見当が付いてきた。このまま道沿いにしばらく行くと、この街では比較的大きな病院が左手にある。恐らくそこに行くのだろう。

案の定、彼は病院の入口で道を曲がると、そのまま病院に入っていった。俺ももちろん後を追った。

彼が受付をする間、俺は待合室の椅子の列の最後尾に座っていた。ここからなら受付も、診察室に向かう廊下もよく見える。もつとも、そうじゃなくても俺は病院ではいつも受付や診療室から一番離れた場所に座る。そういうところに近い場所は、特に具合の悪い人や高齢者のために空けておくべきだ、というのが俺の考えだ。

彼も同じような考えなのか、俺のすぐ前の列の、俺から見

て右に二つずれた席に座った。うつむき加減で時々咳をしている。初めて間近で見る彼のそんな姿が変わってやりたいななどと思う。

受付の看護婦さんが名前を呼ぶ。彼ではなかった。

（そうだ、ちゃんと聞いてないと）

それ以降、彼をずつと見つめていたいという欲望を抑えて、看護婦さんが名前を呼ぶのを注意深く聞いていた。やがて、看護婦さんが呼ぶ。

「イシイさん、イシイユウトさん」

彼が小さく

「はい」

と答えて立ち上がった。

（イシイユウトっていうんだ）

彼の背中が診療室に向かう廊下の奥に消えていったところで、俺はメモ帳を取り出して名前をメモした。ついでにスマホを持って病院の玄関に向かった。

会社に電話する。風邪で病院に来ていて、今日は一日休むと嘘をついた、ちようと病院の呼び出しのアナウンスが流れたりして、なかなか真に迫った嘘になった筈だ。待合室のさつきの椅子に戻り、いろいろ考える。

（この病院に来るってことは……）

俺も何かあったらこの病院だ。まあ、そんな大きな街ではないが、他にも医療機関はないこともない。でも、小さな診療所がほとんど、それなりに設備が整った病院っていうことになる。だからこの病院に来たからといって、どこに住んでいるのかは見当がつかない。

（でも、電話してすぐに母親が来ていたな）

ってことは、母親は駅の近く、せいぜい徒歩一〇分くらいの所にいたということだ。この時間なら、恐らく家から出てきて、そして彼に保険証とかお金とか渡して、勤め先に向かったんだろう。

頭の中に地図を思い浮かべる。駅から円を描いてみる。そんなに大きな円じゃない。駅から上がったところの住宅街か、駅の少し向こうのマンション群、そんなあたりか。駅の向こうの俺が住んでいる住宅街も範囲内だ。ひよつとしたら、ご近所さんの可能性もあるかも知れない。

そんなことを考えている間に、彼、イシイユウトが廊下から姿を現し、さつきの椅子に座る。今度は彼の左斜め後ろから彼をじっくりと観察した。

やわらかい曲線を描く顎の線。耳は少し小ぶりのような気がする。髪の毛は中学生らしく、長くも短くもない。真っ黒なその髪は柔らかさそう。ほんの少し見える首は細いが華奢

という感じではない。鼻はここから見る限りは……そこまで見たところで、彼はマスクを付けた。残念ながら、鼻もきれいな顎のラインもマスクに隠れてしまった。

「イシイユウトさん」

受付に呼ばれて彼が立ち上がる。彼が会計を済ませている間に、俺は病院を出て、入口の脇に少し身を潜めるように佇んだ。風邪なら薬が出る筈だ。薬が出るなら、処方箋を持って病院のすぐ前の薬局に立ち寄る筈、俺はそう読んで先回りした。

案の定、彼は薬局に入り、少し後、袋を下げて出てきた。俺はまた後を付ける。

駅前大きな道を左に曲がらなかつたので、恐らく彼は少し先のマンション群のどこかに向かおうとしているのだろうと予測した。彼はマンション群に至る緩やかな上り坂を上り、三つ目のマンションのエントランスに入っていた。

俺はマンション名をメモし、少し間をおいてからエントランスに入る。エントランスには更に自動ドアがあり、その手前にモニター付の呼び出し用の機械がある。自動ドアの向こうにはエレベーターが二基あるが、そこには住人じゃないと入れない。片側のエレベーターの階数表示ランプが動いていた。

なんとか自動ドアの手前から見える。最上階で止まる。その後しばらく見ていたが、そこから動く気配はなかった。

俺はエントランスを出て、郵便受けを探す。エントランスから横に回り込んだ所にあつた。最上階は十八階のようだ。一八で始まる番号を探し、一八〇一から横に見て行く。『石井』が見つかった。一八〇八、一番隅だった。郵便受けをざっと見るが、十八階にもそれ以外のフロアにも他に石井は見当たらなかつた。

俺はメモ帳の彼の名前とマンション名の下に部屋番号を書き加え、マンションを出た。

(彼の名前と住所と部屋番号を知ることが出来たから、今日はいい一日だな)

そして、誰もいない家に向かった。なんとなくわくわくしていた。

その日の夜、俺はいつものようにジョギングに出掛けた。が、今日はコースを変更した。

駅の手前の大きなショッピングセンターの脇の道から電車の線路がある高架をくぐって駅の向こうに出る。駅ビルを越えて右に折れると緩やかな上り坂。そして、彼の住むマン